

Ⅱ 定点把握対象疾患の発生動向

1 定点把握対象疾患の概要

1) 内科定点及び小児科定点(インフルエンザ/COVID-19 定点)の感染症

インフルエンザの 2023-2024 年シーズンは、例年と比較しても早い時期から報告数の増加が観察され、2023 年 9 月中旬には定点当たり報告数 10.00 を、2023 年 10 月下旬には定点当たり報告数 30.00 を超えた。その後、2024 年 3 月下旬に至るまでの間、報告数が多い状況が続いた。2024-2025 年シーズンは、2024 年 11 月中旬から報告数が増加し始め、2024 年第 50 週(12/9-15)には定点当たり報告数 10.00 を、翌週には 30.00 を超え、年末にかけて急激な増加が観察された。新型コロナウイルス感染症は、2023 年第 19 週(5/8-14)の報告開始以降、全数報告期に引き続き定期的な流行が観察されている。2024 年は、1 月下旬と 7 月下旬に流行のピークが確認された。

2) 小児科定点の感染症

R S ウイルス感染症は、過去と比較しても早い時期にあたる 3 月中旬から報告数の増加が見られ、4 月下旬にピークが観察された。流行のピークは、前年と比較して早い時期に観察されたものの、定点当たり報告患者総数は前年を下回った。咽頭結膜熱は、前年の 11 月下旬をピークとする大規模な流行が 2024 年に入っても続いており、3 月まで報告数が多い状況が続いた。その後、5 月から 7 月にかけて小規模な夏季流行が観察されたが、前年に観察されたような大規模な流行は 2024 年では確認されず、定点当たり報告患者総数は前年と比較して大きく減少した。A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎は、前年の 10 月中旬以降、高い水準のまま 2024 年に入った。定点当たり報告数は増減を繰り返しつつ、7 月上旬にかけて多い状況が続いた。感染性胃腸炎は、夏季流行は確認されず、2024 年の冬季流行は 11 月下旬から確認されたものの、2020 年を除いた過去 5 年と比較して小さな流行となった。水痘は、2020 年 4 月以降、4 年ぶりに定点当たり報告数の最大値が 0.50 を上回った。定点当たり報告患者総数は前年と比較して大きく増加した。手足口病は、過去に観察された流行と異なり、7 月と 10 月に 2 度の流行のピークが観察され、二峰性の大きな流行となった。伝染性紅斑は、2018 年-2019 年と続いた流行が 2020 年に終息し、その後流行は見られていなかったが、4 年ぶりに流行が観察された。定点当たり報告数の最大値である 3.77 は、1999 年の感染症法以降、最大の値となった。突発性発しんは、例年と同様の動向が観察されたが、過去 5 年と比較すると、年間を通してやや低い水準で推移した。ヘルパンギーナは 6 月から増加し、流行のピークが 7 月に観察された。その後、減少に転じたものの報告数は下がりきらず、10 月にかけて報告が続いた。流行性耳下腺炎は、年間を通して際立った報告数の増加は観察されず、2018 年以降非流行期が続いている。

3) 眼科定点の感染症

急性出血性結膜炎は、年間を通して断続的に報告され、5 月と 12 月に報告数の増加が見られた。流行性角結膜炎は、3 月下旬以降増加し、5 月から 8 月にかけてやや多い状況が続いた。また、12 月以降、再度増加に転じ、やや多い状況にあった。

4) 基幹定点の感染症

ア 週単位報告の感染症(2024年第1週～第52週)

細菌性髄膜炎の定点当たり報告患者総数は0.58であった。過去10年における定点当たり報告患者総数は0.64～1.40の範囲にあり、最小値である0.64を下回った。報告は例年同様に散発的であった。無菌性髄膜炎の定点当たり報告患者総数は3.00であり、前年(3.48)と同水準であった。過去10年の定点当たり報告患者総数2.00～5.70の範囲にあり、報告は例年同様に断続的であった。マイコプラズマ肺炎の定点当たり報告患者総数は78.42であり、前年(1.70)と比較して著しく増加した。過去10年における定点当たり報告患者総数は0.73～47.30の範囲にあり、最大値である47.30を大幅に上回った。第44週(10/28-11/3)に観察された定点当たり報告数5.33は、1999年の感染症法施行以降、最大の値となった。クラミジア肺炎は、2人の報告があり、定点当たり報告患者総数は0.17であった。2020年から2023年にかけて患者報告がなかったため、5年ぶりの報告となった。感染性胃腸炎(ロタウイルス)の定点当たり報告数は0.42であった。2020年以降、流行は観察されず、過去4年間の定点当たり報告患者総数は0.09～0.54の範囲にある。インフルエンザ(入院患者)の定点当たり報告患者総数は41.00であった。過去10年の定点当たり報告患者総数0.09～52.64の範囲内にあったが、最大値の52.64に次いで大きな値であった。流行は内科・小児科定点報告のインフルエンザと同様の期間に観察された。新型コロナウイルス感染症(入院)は、2023年の第39週から報告が開始されている。2024年の定点当たり総報告数は、220.83であった。年齢階級では70歳以上の報告が全体の74%を占めている。

イ 月単位報告の感染症(2024年1月～12月)

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症の定点当たり報告患者総数は20.75であり、前年(16.28)を上回った。全国(32.80)と比較すると少なかった。ペニシリン耐性肺炎球菌感染症の定点当たり報告患者総数は、2005年から2011年にかけて10.00を超えていたが、その後は0.70～6.30の範囲で推移している。2024年の定点当たり報告患者総数は3.42で、全国(1.91)より多かった。薬剤耐性緑膿菌感染症は、年間を通して1例のみの報告となった。定点当たり報告患者総数は2007年までは1.00以上であったが、2008年から2023年においては1.00未満で推移している。2024年の定点当たり報告患者総数は0.08で、全国(0.15)と比較しても少なかった。

5) 性感染症定点の感染症

性器クラミジア感染症の定点当たり報告患者総数は、2007年までは30.00を上回っていたが、2008年から2023年においては24.12～28.72と、30.00未満で推移している。2024年の定点当たり報告患者総数は25.29で、全国(30.38)より少なかった。性器ヘルペスウイルス感染症の定点当たり報告患者総数は7.66であり、前年(9.14)と比較して減少し、全国(10.20)と比較しても少なかった。過去10年の定点

当たり報告患者総数は 7.47～9.14 の範囲にある。尖圭コンジローマの定点当たり報告患者総数は 3.55 であり、前年(4.79)と比較して減少し、全国(6.51)と比較しても少なかった。過去 10 年の定点当たり報告患者総数は 3.84～6.04 の範囲にあり、最小値の 3.84 を下回った。淋菌感染症の定点当たり報告患者総数は 5.02 であり、1999 年の感染症法施行以降、最小であった。全国(8.96)と比較しても少なかった。過去 10 年の定点当たり報告患者総数は 5.83～11.23 の範囲にある。